

現代首里方言訳『沖繩対話』(4)

—「第四章 商之部」—

仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政・
渡名喜勝代・山田美枝子・大道好子

はじめに

本稿は仲原・比嘉・仲里・新垣・国吉(2012)、仲原・比嘉・仲里・新垣・国吉(2013)、仲原・仲里・新垣・国吉(2014)(以下、仲原他2012、仲原他2013、仲原2014と称する)の続編であり、明治13(1880)年に発行された『沖繩対話』に記載された琉球語と現代首里方言の比較のための基礎的研究である¹。今回は「第四章 商之部」を取り上げた²。

『沖繩対話』は日本語(標準語)の学習のために作られたものであり、本文の日本語の文の理解を助けるために、本文の脇に片仮名で琉球語が添えられたものである。しかし、その出自の詳細は『沖繩対話』には記されていない。

しかし、糖業研究会出版部(1916:6)はこの『沖繩対話』に付された「琉球語」を「首里語」と限定し、話者についても「護得久代議士の父故護得久按司朝常氏等」であるとしている。

また、これまでの報告(仲原他2012、仲原他2013、仲原他2014)でも明らかのように「現代琉球語」のなかの「首里方言」と非常に近いことばである。これらを勘案すると『沖繩対話』に併記された琉球語は「首里方言」としてよさそうである³。

なお、国立国語研究所(1963:19)に挙げられた三つの階級(デーミョー: 貴族階級、サムレーまたはユカッチュ: 士族階級、ヒャクショー: 平民階級)のうち、『沖繩対話』の「首里方言」がどのことばと最も近いのかについては詳しい分析が必要であるが、陶業研究会(1916)の記述のほか、現代の首里方言では使用されていない語・表現があちらこちらにみられることなどから、国立国語研究所(1963)の「deemjoo◎」に近いと思われる「ウドウン トウンチ」(現代首里方言では士族よりも上の階級とされることば。語源は「御殿 殿内」)

と呼ばれる人々の話すことばに近いと推察されるが、現在の首里でこの「ウドゥントゥンチ」の「クトゥバ」（ことば）を自由に使いこなす話者はほとんどいないと思われる⁴。

今回取り上げた「現代首里方言」は、旧士族階級や旧平民階級のことばである。両者の区別が全くないわけではないのだが、分けて示すほどの「差」ではないため、本稿では「現代首里方言訳」としてまとめて掲載する。

なお、現代首里方言で他の表現がある際は「備考」に記述した。また、話者⁵によって単語や表現が異なる場合にも、その差異を「備考」で示した。

調査に用いたのは『琉球語便覧』に収載の『沖繩対話』である。当初は復刻版『沖繩対話』を用いていた。しかし、『琉球語便覧』収載の『沖繩対話』には、「伊波普猷氏に乞うて別に之を羅馬字で写して貰った」（『琉球語便覧』凡例。旧字は新字に直して引用した。また、「歴史的仮名遣い」も「現代仮名遣い」に改めた）「ローマ字表記」も併記されている。そこで底本を『琉球語便覧』収載のものに切り替えた。それに伴い、本文中の片仮名表記に疑問がある際に併記されているローマ字表記が大いに参考になった。

凡例

1. 調査で使用した『琉球語便覧』の本文(和文)、本文(片仮名)も表に取り入れ、明治期の首里方言と現在(平成)の首里方言を対照できるようにした。
2. 『琉球語便覧』本文の和文表記は漢字カタカナ交じり文で書かれており、表記も「歴史的仮名遣い」「旧字体」で記されている。本稿では読みやすさを考慮し「現代仮名遣い」「新字体」にし、漢字カタカナ交じり文から漢字ひらがな交じり文に改めた。このほか、本文の表記に際し、漢字に振られたルビはひらがなにし、漢字の後に()を付し、その中にルビを入れた。また、踊り字は本字に置き換え、区切りとして使用してある「。」を空白にした。また文末に句点を添えた。
3. 『琉球語便覧』に標準語に併記された首里方言の記述には片仮名が使用されており、補助記号「・」(圏点)が記されている。しかし、圏点は非常に小さく見づらいため、読み手が読み誤りやすい。本稿ではこの圏点を使用せず、簡易音韻表記として片仮名を使用した(「テ」=「ティ」、「デ」=「ディ」、「ト」=「トゥ」、「ド」=「ドゥ」、「ヒ」=「フィ」、「ヘ」=「フェ」、「ホ」=「フォ」、「シ」=「スイ」、「ヅ」=「ズィ」、「ツ」=「ツイ」、「イ」=「イィ」、「ウ」=「ウゥ」と表記〔『琉球語便覧』のローマ字で確認済み〕。このほかにも長音は「ー」で表記し、「子」は「ネ」に改めた。
4. 現代首里方言の記述は、広く一般に利用してもらえるように音声的仮名表記にした。片仮名表記は西岡・仲原(2006[2000]:192-193)の表記を採用したが、句読点に関しては現代日本語に準じて補って示した。ちなみに、首里方言には特殊な発音がいくつかみられるため、以下のように特殊な片仮名で表記する。
「ツフ」「ツヤ」「ツン」「ツウイ」「ツウエ」「ウゥ」「イィ」「ン」
/?we/ /?ja/ /?N/ /?wi/ /?wa/ /?u/ /?i/ /?N/
5. 会話文は、一つ一つの会話を一つの枠内に入れた。会話文の区別については『沖縄対話』を参照した。『沖縄対話』では話者を○、○○で区別しているが、いくつか適合しない部分もあった。本稿では、同一人物が発したとみられるセリフは同じセルに入れた。なお、会話文には回ごとに通し番号(No)を付した。

■第四章 商之部 第一回

No	頁	本文(和文)	『沖繩対話』本文(沖繩語)
1	p.43	当年の砂糖は、どれ位、御買込(おかいこみ)に、なりました。	クンドウヌ サトーヤ チャヌ シャク ウケーリニ ナヤビタガ。
2	p.43	昨年よりは 少なくありました。	クズヤカー イキラサヤビータン。
3	p.43	二三万挺(ちよう)は ござりましよう。	ニサンマンチョーヤ。ヤラ ハズイ デービル。
4	p.43	否(いゝ)え、漸く、一万挺位で ござります。	アヤビラン。ヨーヤク イチマンチョー ヌ シャクドウ ヤヤビール。
5	p.43	相場は 何程度で ござりました。	ソーバー チャヌ シャクガ ヤヤビ ータラ。
6	p.43	幾口(いくち)にもなりましたが平均(へいきん)四円五十銭位でございります。	イククチン ナトーヤビータスイガ ウ シトウナミティ ユイイングジッシンヌ シャク ヤヤビーン。
7	p.43	最早 残らず 売捌(うりさば)けましたか。	ナー スーヨー ウイイサバチガ シミ シェーピタラ。
8	P431	はい 先日の石龍丸で 残らず 贈り切りました。	ウー クネーダヌ シチリユーマル カラ スーヨー ムタシャビタン。
9	p.43 -44	それは よく 御手が届(とど)きました。大阪の相場は 六円四十銭位と 聞きますれば 大分の御利益(ごりえき)でござりましよう。	ウレー ユー トウドウチャビタサー ウーサカヌ ソーバー ルクイイン シ ジッシンヌ シャクンディ イチ チチ ヤビースイガ ウフオークウモーキシ ェービーラ ハズイ。
10	p.44	御承知の通り 金利より 運賃(うんちん)蔵敷(くらしき) 其外の 雑費(ざつぴ)を 引きますれば誠に薄(うす)きものでござります。	ウシリ ミショーチョール グトウ リーカ ラ ウンジン クラシチ ウヌフカヌ ザ ツピ ヒチーネー ゴーイイ ウフイドウ ナヤビール。

■第四章 商之部 第一回

No	現代首里方言	備考欄
1	クンドウヌ サーターヤ * <u>チャヌ アタイ</u> コーイイリ シミシエービタガ？	*国吉氏は「チャツサグレー」も入れ替え可能だが「チャヌ アタイ」が優勢とする。
2	クジュヤカー イキラサイビータン。	
3	ニサンマンチョーヤ * <u>アル ハジ ヤイ</u> <u>ビーン</u> 。	*「ネーイビランガヤー」でもよい。
4	アイイビラン。* <u>ヨーヤク</u> イチマンチョー グレードウ ヤイビール。	*「ヤットウ」でもよい。
5	ソーバー * <u>チャヌアタイガ ヤイビー</u> <u>タラ</u> 。	*現在は「～ガーラ」(推量の係り結び)より、「チャヌ アタイ ヤイビーガ(ヤー)」が多用される。以下同じ。
6	イククチン ナトーイイビータシガ、 トウナミティ * <u>ユイイングジツシンヌ</u> アタイ ヤイビーン。	*70代以下の話者は「円」を「エン」、「五十銭」を「ゴジツセン」とする。以下、同じ。
7	ナー ムル * <u>ウミシエービティー</u> ？	*国吉氏は「ウミシエービタンナー」か「ウイidou シミシエービティー」がよいとする。
8	ウー、クネーダヌ セキリユーマルカラ ムル * <u>ウクヤビタン</u>	*「ムタサビタン」でもよい。
9	ウレー イー テイクバイ ヤイビーテ ーサ。オーサカヌ ソーバー ルクイイン シジツシングレーンディ チチャビーシガ * <u>ウフオークス</u> モーキ ヤミシエービール ハジ (ヤイビーン)。	*国吉氏は「ウフオークス」を「ダテーン」とする。
10	ウシリミソーチョール グトウ * <u>リーカラ</u> ウ ンチン ** <u>クラシキ</u> ウヌ フカヌ ザッピ フィチャーネー ジョーイイ *** <u>イフイ</u> ドウ ナイビール。	*「ディー」でもよい。 **渡名喜氏は「クラチン」がよいとする。 ***国吉氏と渡名喜氏は「ウフィ」という。以下、同じ。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
11	p.44	私も 少々、買ひましたが 時が 後れましたゆえ 元位のもので ござりましょう。	ワンニン ウフェー コーヤビタスイ ガ ジシツィヌ ウクリタクトウ ムート ウヌ シャクトウ アラ ハズィ ヤヤ ビーン。
12	p.44	定めて 沢山なもので ありましょ う。	チシティ ウフオーク ヤラ ハズィ デービル。
13	p.44	否へ 僅(わず)か 四千挺計で ござります。	アヤビラン。ワズィカ シシンチョー バカーイidou ヤヤビール。
14	p.44	それは 思の外 少くござりますが なんぞ 外に 御買いになりました か。	ウレー ズングェー イキラサヤビー スイガ ヌーヤラワン ストゥニ ウケ ーミシエーガ シャビタラ。
15	p.44	格別のものも ござりませぬが 焼 酎を少々送りました。	ドゥク イイームノー ネーヤビラン。 ショーチュー ウフェー ムタシャビ タン。
16	p.45	それは よい御心付きで ござりま したが どの位に 捌けます。	ウレー イイー ウチヌツイチャテー ヤビーサー。チャヌ シャクシエー ウイイサバチャビーガ。
17	p.45	二斗入で 大抵 七円五拾銭位に は はけましょう。	ニトウイリッシ テーゲー シチイイン グジッシンヌ シャコー ウイイサバチ ユラ ハズィ デービル。
18	p.45	是からも 便毎に 御送りに なり ますか。	ナマカラン ビングトウ ウムタシミシ エーガ シャビーラ。
19	p.45	五六石ずつは 出す積(つもり)で ありますが 一時(いちじ)に 多分 の買込が六(む)つかすくて 之に は困ります。	グルックヌ シャクナーヤ ンジャ シュル カンゲー ヤヤビースイガ イチドウチネー ウフオークヌ ケー イレー ムツィガシャヌ クリネー ス ツクエー チョーヤビーン。

No	現代首里方言	備考欄
11	ワンニン イフェー コーイビタシガ *トウチヌ ウクリタクトウ ムートウヌ アタイドゥ アル ハジ ヤイビーン。	*「ジシチ」は現在、「時機」よりも「季節」の意としての使用が増えている。国吉氏は「ヒョーシヌガチ」（機会を逃し）がよいとする。
12	* <u>サダミティ</u> ウフォーク ヤル ハジ ヤイビーン。	*国吉氏は「チットウ」または「ウーカタ」がよいという。
13	アイビラン。ワジカ * <u>シシンチョービケ</u> ニンドウ ヤイビール。	*70代の話者は「ヨンセンチョー」しか用いない。以下、同じ。
14	ウレー ウミーヌ フカ イキラサイビー シガ ヌーガナ フカニ コーミシエービタ ガ。	
15	* <u>ナンジュ</u> イームノー ネーヤビランシ ガ ** <u>ショーチュエ</u> イフェー ウクヤビタ ン。	*「アンスカ」でもよい。「アンスカ」は強く否定、「ナンジュ」はやんわり否定の違いがある。 **「サキ」でもよい。
16	ウレー イームン ミー チキテーミシエ ービーサ。チャヌ アタイツシエー ウイサイバチャビーガ？	
17	ニトウイリッシ テーゲー ナナイングジ ツシンヌ アタイエー * <u>ウイイサバチュル</u> ハジ ヤイビーン。	*国吉氏は「ウイイサバカリール」がよいとする。
18	ナマカラン ビンヌカージ ウクミシエール ウカンゲードウ ヤミシエービーミ？	
19	* <u>グルックナーヤ</u> ツンジャスル カンゲ ー ヤイビーシガ、チュケーン(ネー) ウフォーク (** <u>チュケーヌーンカイ</u>) コー イアチミーシエー ムチカサヌ、クリ ネー *** <u>スツクエーチョーイイビーン</u> 。	*70代の話者は「ゴロツコク」がよいとする。 **渡名喜氏は「チュケーンナカイ」、大道氏は「チュケーヌンカイ」がよいとする。 ***国吉氏は「ヤクケーヤイビーン」がよいとする。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
20	p.45	金城(かなぐすく)村の 醸造 (じょうぞう)計りで ござりま すか。	カナグスイクムラウウティ タリール ウッサガ ヤヤビーラ。
21	p.45	否へ 赤田 鳥小堀辺よりも 集めます。	アヤビラン。アカタ トウンジュムイ フィンカラン トウイアツイヤビーン。
22	p.45	一石 大阪までの 雑費は 何程かかりますか。	イック シャーイイ ウーザカ マデ イヌ ザッペー チャヌ シャクガ カ カヤビーラ。
23	p.46	瓶代(かめだい)より 簀巻(す まき)手間(てま)運賃杯にて二 円五十銭位で あります。	カーミデーカラ スイマチディマ ウ ンジンシャーイイ ニイイン グジュッ シンヌ シャク ヤヤビーン。
24	p.46	それでは 大分の利潤で ござ りましょう。	アン ドウン ヤレー テーブン ヌ リウク ヤラ ハズイ デービル。
25	p.46	これも少々は 益になります が 来年よりは 首里の士族中にて 会社(くわいしゃ)を 立て 砂 糖焼酎とも 一口に 買込み 他県商人の手に 渡(わた)さぬ 様に 致したいと 思います。	クリン ウフエー トウク ナユスイガ ヤーンカラー シュイイヌ サムレー ジューシャーイイ クワイシャ タティ ティ サトーン ショーチューン イッ ティゲーツシ タチンヌ ショーニン ネー ワタサンクトウ シーテーンデ イ ウムトーヤビーン。
26	p.46	それは 至極御同意で ござり ますが 別にも 誰(たれ)にか 御話になりましたか。	ウレー シグクグドゥーイ ヤヤビー スイガ ビツイニン ターンカイン ウ ファナシミシェーガ シャビタラ。
27	p.46	未(ま)だ 誰れにも 語りませ ぬ。	マーダ ターンカイン イヤビラン。
28	p.46	それでは 二(ふ)人で 早速 (さっそく)手を 着(つけ)ま しょう。	アンシエー タイイシャーイ フェー ク ティー ツイキヤビラ。

No	現代首里方言	備考欄
20	カナグシクムラウウティ タリール * <u>ウツサ</u> <u>ガヤイビーラ</u> 。	*「ウツサドウ ヤイビーレイ」でもよい。なお、国吉氏は「ヤイビーリー」と発音する。また、国吉氏は「ウツサガ ヤイビーンナー」でもよいとする。
21	アイイビラン。アカタ トウンジュムイイフィンカラン トウイイアチミ ヤビーン。	
22	イックサーニ オーサカ マディヌ ザッペー * <u>チャヌ</u> <u>アタイガ</u> <u>カカイビーラ</u> 。	*「チャッサ カカイビーガ」でもよい。
23	カーミデーカラ シマチディマ ウンチンサーニ ニイイングジッシングルレー ヤイビーン。	
24	アン ドウン ヤレー ユフドウヌ * <u>リトウク</u> ヤル ハジ ヤイビーン。	*「リトウク」は「モーキ」(備ナ)にしてもよい。以下、同じ。
25	グリン イフェー トウク ナイビーシガヤーンカラー スイヌ サムレー ビケーンサーニ クワイシャ タティティ サーターン サキン イッティゴーイイツシ フカヌ ケンヌ * <u>ショーニヌンカイエー</u> ワタサングトウ シェーヤーンディ ウムトーイイビーン。	*大道氏は「アチネーサー」がよいとする。
26	ウレー * <u>シングク</u> <u>グムツウンナ</u> <u>クウ</u> ヤイビーシガ ビチニン ターンカイン ウファナシミシエービタガヤー。	*「グムツウンナ クウ」は「ガッティン」でもよい。なお、渡名喜氏は「ユヌ カンゲー」とする。
27	マーダ ターンカイン * <u>イヤビラン</u> 。	*「イチェー ウウイビラン」でもよい。
28	アンシェー タイイサーニ フェーク ティー チキヤビラ。	

■第四章 商之部 第二回

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
1	p.47	お早くございました 大阪(おおさか)辺の 商売は 如何い 景気 でございます。	フェーサ イメンシユービタサー ウーザカ フィンヌ ショーバーヤ チャール チーチガ ヤヤビータラ。
2	p.47	余り 変異も ありませぬ。先ず 通常の 模様で ございます。	アンマディ カワトーセーネン マズィ イツショース ムチヨー ヤヤビーン。
3	p.47	此度は 如何い 品物(しなもの)を 御仕入になりました。	クリウウデー スーシナガ ウシメー ナヤビタラ。
4	p.47	左様でございます。彼地(あちら)での 仕入は 先ず 反布類が 重でありまして 其外は紫檀器陶器 杯で ございます。	アン デービル アマウウティヌ シメーヤ マズィ タンフルイ ムトウナチ ウヌフカー シタンヌ ドーグムン ヤチムヌンデー ヤヤビーン。
5	p.47	御荷物は 参りましたか。	ニーヤ チョーヤビーミ。
6	p.47	漸く 一昨日(おととい) 到着致しました。	ヨーヤク ウウッティー チョーヤビーン。
7	p.47	最早 御開きになりましたか。	ナー ウフィラチ ミシユーガ シャビタラ。
8	p.47	昨日 皆 開て 仕舞ました。	チヌー ンナ フィラチユーヤビーン。
9	p.48	それでは 一通り 御見せ 下されませぬか。	アンシユー フイトウトウーイユー ウミ シミショーラリーヤ シャビラニ。
10	p.48	あちらに 在りますから 御覧下さい。	アマ ナカイ アヤビークトゥ ウミカ キティ クイミシユービリ。
11	p.48	成程 見事な 紫檀茶棚が 参りましたが 是迄よく 持たたもので ございます。此値段は どの位で ござりましょう。	チユー リツパナ シタン チャダナ ヌ チョーヤビースイガ クリマディ ユー ムツチェール ムン ヤヤビールンナー クリ ガ デーヤ チャヌ シャク ガ ヤヤビーラ。

■第四章 商之部 第二回

No	現代首里方言	備考欄
1	フェーベートウ * <u>メシエービテーサヤ</u> ニ。オーサカフィンヌ アチネーヤ チャ ール チーチガ ヤイビータラ。	*「ツウエンシエービテーサヤー」「ツメンシエー ビテーサヤー」でもよいが70代は「メシエー ビテーサヤー」しか使用しない。
2	* <u>アンマディ</u> カワトシエーネー(イイ)ビ ラン。ナマヌ トウクロー フィージーヌ トウーイイ ヤイビーン。	*「アンスカマデー」でもよい。あるいは、「ウリ フドウ」も使用可能だが、意味が「それほど」の ように変わってしまう。
3	クリウウター * <u>ヌーヌ シナ コーイイリ</u> <u>シミシエービタガ</u> 。	*「ヌーガ シリ シミシエービタラ」でもよい。
4	アンヤイビーン。アマウウティヌ コー イイレー * <u>ウーカタ ヌヌトウ タンムヌ</u> <u>ンデー ヤイビーシガ</u> ウヌフカー シタンヌ ドーグムン ヤチムヌンデー ヤイビーン。	*国吉氏は「マジェー ヌヌトウ タンムヌンデー ムトウニッシ」がよいとする。
5	ニーヤ チョーイイビーミ。	
6	* <u>ヨーヤク</u> ウウツティー チョーイイビー ン。	*国吉氏は「ヤットウ カットウ」がよいとする。
7	ナー フィラチミシエービティー。	
8	チヌー ムル フィラチエーイイビーン。	
9	アンシエー チュトウイエー ミシティ クイ ミシエービラニ。	
10	アマンカイ アイイビークトウ ウミカキティ クイミシエービリ。	
11	チェー、リッパナ シタン チャダナヌ チョーイイビーシガ クリマディ ユー ム ツチェール ムン ヤイビーールンナー。 クリガ デーヤ チャヌ * <u>サクガ</u> ヤイビ ーラ。	*70代の話者は「アタイ」を使用する。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
12	p.48	それは 二十円計りに 付いてお ります。	ウレー ニジューイイン バカーイイ アターヤビーン。
13	p.48	此頃 望みの人が ありますから 三十円で 御譲り下さいませぬ か。	クヌ グル ヌズドースィガ ウウヤビ ークトゥ サンジューイイン シャーイ イ ウユズイミ ショーチ ウタビミシエ ービラン カ ヤー。
14	p.48	私も 少し 売先の 心当がありて 買いましたから 先ず 御断り申し ます。	ワンニン ウフェー ウユル サチヌ ククルアティヌ アテイドゥ コーテー ヤビークトゥ マズイ ウクトウワイ デービル。
15	p.48 -49	貴方は 何時でも 御注文に さ えなれば 御手に入るものであり ますから 此れは 是非 御譲り下 されませ 代金は 今5円丈け増 しましょう。	ウンジョー イツイ ヤティン ウワー ツイレードウン シミショーレー ウトゥ ミシエービークトゥ クレー ズィフィ ウユズイミショーチ ウタビミシエービ リ デーヤ ナーグイインヌ シャコ ー ウフク ナシャビラ。
16	p.49	そうでござりますか 宜しうござりま す 御持ちなされませ。	アンシミシエービーミ ヌタシャヤビ ーン ウムチミショーチ イメンシエ ービリ。
17	p.49	又 あの 茶盆 茶碗杯も 二三十 ずつ 御分け下されませぬか。	マタ アヌ チャブン チャウヌンデ ーン ニサンジュナーヤ ウワキミシ ョーチウタビミシエービリ。
18	p.49	御入用の分は 御取りなされませ 併し 其内に古き盆で よく ふき だしたのが ありますが 其れは 注文物で ござりますから 御残し 下されませ。	ウイリユーヌ ブノー ウトウイイミシエ ービリ ヤンドウン ウヌウチナカイ フルブンヌ ヌー フィチャイイ イル ヌ ンジトースィガ アヤビースィガ ウレー アツイレームン ヤヤビーク トゥ ウヌクシミシエービリ。

No	現代首里方言	備考欄
12	ウレー ニジューイイン ビケーン アト ーイイベーン。	
13	クヌグル ヌジュードール ッチュヌ ウウイイ ビークトゥ サンジューイインサーニ *ユジ ティ クイミシエービランガヤー。	*「ウウジミソーチ ウタビミシエービランガヤ ー」でもよい。
14	ワンニン イフェー ウイイル サチヌ ク ルアテイヌ アテイドゥ コーテーイビー クトゥ マジ ウクトウワイイ サビラ。	
15	ウンジョー イチ ヤティン ツワーチレード ウン シミソーレー (*シナムノー) **トウラ リヤビークトゥ クレー ジフィ ユジティ クイミシエービリ。 **グイインヌ アタイエ ー ウフクナサビラ。	*仲里氏は「シナムノー」を入れる。 **「トウイユシミシエービークトゥ」でもよい。 ***仲里氏・新垣氏以外(70代)の話者は「グイ イン」は「ご縁」の意でしか使用しないため、「ゴ エン」がよいとする。
16	アンシミシエービーミ? ユタサイイベー ン。*ウムチミソーチ メンシエービレー。	*「ウムチシエービレー」でもよい。また、国吉 氏は「ウムチミソーチ」を「ウムチナティ」とす る。
17	マタ アヌ チャブン チャワヌンデー ンニサンジュナーヤ ワキティ クイミシエー ビリ。	
18	ウイリユーヌ ブノー ウトウイイミシエービ リ。(アン)ヤイビーシガ ウヌ ウチナカイ フルブヌ ティーカキラットール ムンヌ デーダカムヌ アイイビーシガ ウレー アチレームン ヤイビークトゥ *ヌクチク イミシエービリ。	*「ヌクシミシエービリ」でもよい。

No	頁	本文(和文)	『沖繩対話』本文(沖繩語)
19	p.49	反布の類は 何処にござります。	タンフルイェー マーナカイガ アヤビーラ。
20	p.49 -50	只今 出して 参えりますが 余り 宜しい品は ありませぬ。	ナマ ンジャチチャーピースイガ ア ンマディイイーシナーネーヤビラン。
21	p.50	どの様な物で ござります。	ヌーンデーヌガ アヤビーラ。
22	p.50	木綿物が 重で 絹類は 僅か二 三十反計 ござりましょう。	ムミンフトウナチ イーチュムンヌル イェー ワズイカ ニサンジツタン バ カーイイドウ アラハズイ デービル。
23	p.50	絹物は なぜ 御仕入に なりま せぬか。	イーチュムノー チャーシ ウシメー ネー ナヤビランタガ。
24	p.50	近頃は ずっと 高くなりました上 一体 此地では 冬衣(ふゆぎ)が 格別いりませぬから 持下りまし ても 合いませぬ。	クヌグロー ドウツツ タカク ナトー ル ウイ クマウウテー フユムノー アンマデー イランクトウ ムチ クダ テイン アタラン。
25	p.50	成程 御尤でござります 木綿絹は 沢山参えりておりますか。	シー グムツウン デービル ムミン ジマー ウフオーク チョーヤビーミ。
26	p.50	はい これは 五百反程 ござりま す。	ウー クレー グヒヤツタンバカーイイ アヤビーン。
27	p.50	左様なら 是れも 少々ずつ 御 分け下されませ。	アンシエー クリン ウフィナーヤ ワ キラチ ウタビミシエービリ。
28	p.50-51	御望みの 分は あげましょう。	ウヌズミス ブノー アギヤビラ。

■第四章 商之部 第三回

No	頁	本文(和文)	『沖繩対話』本文(沖繩語)
1	p.51	貴方は 先頃 宮古島より 沢山 反布を 御仕入になりましたと 承 りましたが 如何程 御買込になり ましたか。	ウンジョー クヌメー ミヤークジマカ ラ ウフオーク タンフ ウトウイイリニ ナタンディチ チチャビタスイガ チャ ヌ シヤクガ ウケーミシエービタラ。

No	現代首里方言	備考欄
19	ヌヌルイェー * <u>マーナカイガ</u> アイビーラ。	*仲里氏は「マーナカイ」がよいとする。また、国吉氏の母も「ナカイ」を使用していたという。
20	ナマ ヅンジャチ チャービーシガ * <u>アンスカ</u> イーシナ ネーイビラン。	*「ナンジュ」でもよい。また、国吉氏は「チャミシカ(ヌ)」を使用するという。
21	* <u>ヌーンデーヌ</u> アイビーガ?	*「チャヌフージュヌ」または「チャヌヨーナ ムンヌ」でもよい。
22	ムミンムン ムトウナチ イーチュムヌンデー ワジカ ニサンジツタンビケージ アルハジ ヤイビーン。	
23	イーチュムノー ヌーンディチ コーイイリ シミシエービランタガ。	
24	クヌグロー ユカイ タカクナトルウウィ ーニ クマウウデー フユムノー ナンジュ イリユネーイビランクトウ ムッチ ヅン ジン アタイビラン。	
25	ンー、* <u>グムツウン</u> ヤイビーン。ムミン ジマー ウフオーク チョーイイビーミ?	*仲里氏・新垣氏・渡名喜氏・山田氏は「グムツウン デービル」は使用可能とする。
26	ウー、クレー グヒヤツタンビケージ アイ イビーン。	
27	アンヤイビーレー クリン ウファイナーヤ ワキラチウタビミシエービリ。	
28	ウヌジュミヌ ブノー ウサギヤビラ。	

■第四章 商之部 第三回

No	現代首里方言	備考欄
1	ウンジョー クヌメー ナークカラ ウフオー ーク タンフ コーイイリ * <u>ナミンソーチャ</u> ン ディ イチ チチャビタシガ チャヌ アタイ コーミシエービタガ。	*山田氏は「シミソーチャン」がよいという。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
2	p.51	五六百反程 買入の積りで 参りましたが いや早 実に 大変な 値段 ⁶ で とても 商法に なりませぬ故 聊か 仕入ました。	グルッピヤクタンヌ シャコー コーユル カンゲーッシ イチャビタスイガ イエーナー ジンニ ドウツウヌ コージチャティ チャーシン ショベーネーナランタクトウ ウフイドウ トウヤビタル。
3	p.51	八重山島の 白細上布も 大分 御手に入りましたでござりましょう。	イエーマジマヌ シルフスジョーフン テーブン ウトウミショーチャラ ハズィ デービル。
4	p.51	なかなか そうは 参りませぬで 漸く 十八舂 二十舂の品で 二十一反程 買集めました。	チャーシン アンシエーナランアティ ヨーヤク ジューハッシュニジッシュヌ シナ ニジューイッタンヌ シャコー コーイイ アツイミ ヤビタン。
5	p.52	凡 何程位の 相場で ござりますか。	テーゲー チャヌ シャクヌ ソーバガ ヤヤビータラ。
6	p.52	とても 御話しには なりませぬ。	チャーシン ウファナシエーナヤビラン。
7	p.52	細上布は 此頃 大分 直が出ましたと承りましたで 決して 御損にはなりませんまい。	フスジョーフオー クヌグル ドウツウデームツチョーンディ イチョーヤビークトウ チシティ グスンネーウナミシヨールン ハズィ。
8	p.52	はい 損したとても わずかなものでありますから 左まで迷惑には なりませぬ。	ウー スン シン ワズィカヌ ムンドウ ヤヤビークトウ アンマディ ミーワコー シャビラン。
9	p.52	私は 此頃 大坂の得意先から 先島反布の 注文を受けましたが 貴方の品を 少々 御譲り下されませぬか。	ワンネー クヌグル ウーザカヌ ツウエーカショースイカラ サチシマタンフヌ チュームン ウキトースイガ ウンジュヌ シナ ウフェー ウタビミシエーヌ ナイエーシャビラニ。

No	現代首里方言	備考欄
2	<p>*<u>グルッピャクタン</u>ヌサコー コーイイルカ ンゲーツシ イチャビタシガ イェー ナ ー ジュンニ ユフドウヌ ジンダカ **<u>ヤティ</u> チャーシン ショーバイネー ナランタクトゥ ウフイドゥ トウヤビタル。</p>	<p>*70 代の話者は「ゴロッパャクタン」とする。 **「ナティ」も使用可能。</p>
3	<p>イェーマジマヌ シルフスジョーフン ウフ ウフトゥ トウミノチャーラ ハジ ヤイ ビーン。</p>	
4	<p>チャーシン アンシエーナラン(*アティ) ヨーヤク トゥーヤユミ ハテーンヌ シナ *<u>ニジューイッタン</u>ヌ サコー コーイイア チミヤビタン。</p>	<p>*「ニジューイッタン グレー」でもよい。</p>
5	<p>テーゲー *<u>チャヌアタイ</u>ヌ ソーバガ ヤイビータラ。</p>	<p>*「チャヌアタイ」を国吉氏は「チャヌサ ク」が良いとする。</p>
6	<p>チャーシン ウファナシェー ナイビラン。</p>	
7	<p>フスジョーホー クヌグル ユフドウ デー ムツチョーンディチ チチョーイビークトゥ チシティ *<u>グスンネー ナミソーラン</u> ハ ジ。</p>	<p>*「スノー ネーイビラン ハジ」でもよい。</p>
8	<p>ウー、スンシン ワジカヌムドゥ ヤイ ビークトゥ アンマディ ミーワクネーナイ イビラン。</p>	
9	<p>ワンネー クヌグル オーサカヌ ツウェーカソーシカラ サキシマタンフヌ アチレー ウキトーシガ ウンジュガ シナ イフェー *<u>ユジュティ クイミシエービラ</u> ニ。</p>	<p>*「ワキティ クイミシエール クトゥヌ ナイエー サビラニ」ともいえる。また、70 代の話者は「ク イミシエービラニ」を「クイミソーランガヤー」とい う。「クイミシエービラニ」は「ウタビミシエービラ ニ」にすると非常に敬意が高くなる。</p>

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
10	p.52	幾反計りで ござりましょう。	ナンダンバカーイイガ ヤヤビーラ。
11	p.52	百五十反 願われませぬか。	ヒヤクグジッターノー ナイエーシャビラニ。
12	p.52 -53	三百反程は ありますから 御上げ申しても よろしくござります。	サンビヤクタンヌシャコーアヤビークトウ ウシャギティンユタシャヤビーン。
13	p.53	利益(もうけ)は 大坂売込の模様で 折半(せっぱん)と致しましたら 如何でござりましょう。	モーケー ウーザカウウティ ウユル ムヨーツシ ハンブンワーキー シャ ラー チャーガ ヤヤビーラ。
14	p.53	其れでよろしくござります。	アンシ ユタシャヤビーン。
15	p.53	何時 御送りになる 御積りでござりますか。	イツィ ウムタシミシエール ウカンゲ ーヤヤビーガ。
16	p.53	成るべく 早く送らねばなりませぬが 来月半頃でござりませぬば 紺飛白(こんがすり)が 未(ま)だ揃いませぬで荷作(にづく)りが 出来ませぬ。	ナルビチエー フェーク ムタサネー ナヤビランスイガ タツイチヌナカバ グルナランドウンアレー クンジドゥツ チリヌ トウトウナランアティ ニツクイ イヌ ナヤビラン。
17	p.53	紺飛白は 何処へ 御誂へになりました。	クンジドゥツチレー マーンカイ ツウ ワーツィレーミシエービタガ。
18	p.53	例の通り 小禄へ 誂へました。	イッショーストウーイイ ウルクンカイ アツィレーヤビタン。
19	p.53	近頃は 如何な 向が 流行(はや)りますか。	チカグロー チャール ムヨーヌ フ ェーヤヤビーガ。
20	p.53 -54	種々(いろいろ)でござりますが 大抵二十字形の 少し大きな飛白が 能く売れると 申して参りました。	イルイル アヤビースイガ ウーカタ ニジュージガタヌ インテーノー ウ フィシャル トゥツチリヌ ユー ウラリ ーディイチ チチョーヤビーン。
21	p.54	何かと 御交易の御見込でござりますか。	ヌーガナトウ ウケーミシエール ウミ クミガ ヤヤビーラ。

No	現代首里方言	備考欄
10	ナンタンビケージガ ヤイビロー。	
11	ヒヤクグジュッタノー ナイエーサビラニ。	
12	サンビヤクタンヌサコー アイビークトゥ ウサギティン ユタサイビーン。	
13	モーケー オーサカウウティ * <u>ウイイル</u> <u>ムヨーヤティ</u> ハンブンワーキー サラー チャーガ ヤイビロー。	*国吉氏は「ウイイル タミス ムヨー ヤクトゥ」 がよいとする。ただし、新垣氏は「ムヨー」を 「無用」、「模様」は「ムヨー」と区別している。
14	アンシ ユタサイビーン。	
15	イチ ウクミシエール ウカンゲーヤイビ ーガ？	
16	ナルビチエー フェーク ムタサネー ナイイビランシガ タチチヌ ナカバグル ナラドゥンアレー クンジドゥッチリス * <u>シコーイヌ ナテー ウウイビランクトゥ</u> ニジュクイヌ ナイビラン。	*「スリテー ウウイビラン クトゥ」でもよい。
17	クンジドゥッチレー マーンカイ ツワーチ レー シミシエービタガ。	
18	* <u>クリマデイドゥーイイ</u> ウルクンカイ アチ レーイビタン。	*「ナママデイドゥーイイ」でもよい。
19	チカグロー チヤングトール ムヨース フ エーイビローガ？	
20	イルカジ アイビーシガ ウーカタ ニジュージガタヌ インテーノー イフェー マギサル トゥッチリス ユー ウラリーン ディ イチ チョーイビーン。	
21	ヌーガナトゥ ケーミシエール ウカンゲ ードゥ ヤミシエールイ。	

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
22	p.54	茶 昆布(こんぶ)杯を 少し 取り ましょう。	チャー クーブンデー ウフェー トゥヤビーン。
23	p.54	鯉は 如何でござりましょう。	カツーヤ チャーデービルガ。
24	p.54	鯉節は 此地で 余り 利益があり ますまい。	カツーブシェー クマウウテーアンマ デーリウコーネーヤビランハズイ。
25	p.54	田舎(いなか)の方の売ぐあいは 如何でござりましょう。	イナカヌフィンウウティ ウユセー チ ャーガ ヤヤビーラ。
26	p.54	先頃より 余程 景気が 悪くござ ります。	クヌメーヤカ ユフードゥ チーチヌ ヤンデイトーヤビーン。
27	p.54	石炭油は 如何でござりましょう。	シチタンユーヤ チャーデービルガ ヤー。
28	p.54 -55	左様さ 石炭油は 丸屋 堀ノ内 杯にも 沢山参りておりますが 是 もまだ 那覇 首里位で 余り 利 益も あるまいと 存じます。	アンヤヤビーサ シチタンユーヤ マルヤ フリヌウチンデーニン ウフ ォークチョーヤビースイガ クリンナ マ ナーフアシュエインデーヌ シヤ クドゥ ヤティアンマディ トウコーネ ーノーアラニンディ ウマーリヤビー ン。

■第四章 商之部 第四回

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
1	p.55	反布は 最早 悉皆(しつぱい) 御 売捌(さばき)が 出来ましたか。	タンフォー ナー ンナ ウイイサバ チ ガ シミシェービタラ。
2	p.55	否へ 漸く 半分計り 売りました。	アヤビラン。ヨーヤク ハンブン バカーイェー ウヤビタン。
3	p.55	どの位の 平均(ひらび)になりますか。	チヤヌ シヤク ヌ トゥナミニ ナヤ ビーガ。

No	現代首里方言	備考欄
22	チャー、クーブンデー イフェー トウイビーン。	
23	カチューヤ チャー ヤイビীগ?	
24	カチューブシェー クマウウター * <u>アンマ</u> <u>ディ</u> リウコー ** <u>ネーイビラン</u> ハジ。	*「アンスカ」でもよい。 **「ネービラン」ともいう。
25	イナカヌ フィンウウティ ウイシエー チャー ヤイビীগヤー。	
26	クヌメーヤカ ユフトウ ジンヌ ミグイヌ * <u>トウドウクートーイビーン</u> 。	*渡名喜氏は「マシエー アイビラン」がよいと する。
27	シチタンユーヤ チャーヤイビীগ ヤー。	
28	アンヤイビース。シチタンユーヤ マル ヤ ホリノウチンデーニン ウフオーク チ ョーイビースガ クリン ナマ ナーフア シュイインデーヌ アタイドゥ ヤティ ア ンスカ リウコー ネーノーアラニンディ ウマーリヤビーン。	

■第四章 商之部 第四回

No	現代首里方言	備考欄
1	タンフオー ナー ムル ウイガシミソー チャラ。	
2	アイビラン。ヨーヤク ハンブン ビケーノー ウイビタン。	
3	トウナミーネー チャヌサク ナイビー ガ?	

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
4	p.55	只今の処では 絹(きぬ)類が 五円五十銭余りで 木綿類が 一円二三十銭の 平均と 思います。	ナマヌ グトウダウンアレー イーチュルイヌ グイイングジッシン アマイムミンルイヌ イチイニンニサンジッシンヌ トウナミ ヤランディ ウマーリヤビーン。
5	p.55	それでは どれ位の 利益(もうけ)がありますか。	アンドウンセー チャヌ シャクヌ トウクガ ヤヤビーラ。
6	p.55	此節は 雑用丈あれば よい積りでありますから 格別安値で売っております。	クリウウテー ザツピヌ シャク アイイドウンセー ユタシャンディ ウムトーヤビータクトウ ドウツトウ ヤスミテイ ウトーヤビーン。
7	p.55 -56	私も 其積りで 売り出しましたが 最早 売切れた物が 種々(いろいろ)ござります。	ワンニン ウヌ カンゲーツシ ウヤビタシガ ナー ウイイ ハティテール シナヌ イルイル アヤビーン。
8	p.56	如何(いかに)いう品が 切れましたか。	ヌーシナヌ チリヤビタガ。
9	p.56	縮緬(ちりめん)類と 浴衣(ゆかた)地は 早くから 売り切りましたが 紹 紗(しゃ)杯(ばい)の 羽織(はおり)地も 最早一・二反(いちにふた)ならでは ありませぬ。	チリミンルイ トウ ユカダジートー フェークカラ ウイイハティトーヤビーヌ スイガ ルーデー シャーランダーヌ ハウウイイジーン ナー イチニタン ヤカ ウイヤ ネーヤビラン。
10	p.56	それは 誠に よく捌(は)けました。	ウレー ドウツトウ ユー ウイイ サバチ ミシエービタサー。
11	p.56	此頃 買人(かひいて)が 思(おも)の外 多(おほ)くなりまして 殊(こと)に 白縮緬(しろちりめん)の 注文(注文)が 沢山(おほい)ありますが 御持合せ(ごもちあわせ)なら 五六疋(ごふだふだ) 御引受(ごひきうけ)申(まを)すことは 出来(でき)ませぬか。	クネーダンシエー コーヤーガ ズングュー ウフオーク ナティ ビシティシルチリミンヌ チュームンヌ ウフオーク アヤビースイガ ウムチミショーチ ドウンウウラー グルツタノー ウタビミショーラーヤ シャビラン。

No	現代首里方言	備考欄
4	ナマヌ グトウドゥンアレー イーチュルイヌ グイイングジュッシン アマイイ ムミンルイヌ イチイインニサンジッシンヌ トウナミ ヤランディ ウマーリヤビーン。	
5	アンドゥンヤイビレーー チャヌ サクヌ トウクガ ヤイビレー。	
6	クリウウテー ザッピヌ サク アイドゥン シェー ユタサンディ ウムトーイビータ クトゥ イッペー *ヤシミトーイビーン。	*「ヤシミティ ウトーイビーン」でもよい。
7	ワンニン ウヌ カンゲーッシ ウイビタ シガ ナー ウイイ ハティテール シナヌ イルイル アイビーン。	
8	ヌーヌ シナヌ チリヤビタガ。	
9	チリメンルイトウ ユカタジトー フェーク カラ ウイイ サバチョーイビーシガ ロー ンデー シャーンデーヌ ハウウイジ ーン ナー * <u>イチニタンヌ</u> ウイイシェ ー ネーイビラン。	*国吉氏は「イチニタンヌ ウッサドウ」あるいは 「イチニタンビケンドウ」がよいとする。
10	ウレー イッペー ユー ウイイサバチミ シェービテーツサー。	
11	クネーダンシェー コーヤーガ ウミーヌ フカ ウフク ナイビティ クトゥニ シル チリメンヌ アチレーヌ ウフオーク アイビーンシガ * <u>ウムチドゥン</u> <u>ウウイビ ーラー</u> グルクタノー ウタバミシェール クトゥ ナイビランニ。	*「ウムチドゥン ヤミシェーラー」でもよい。ま た、渡名喜氏は「ウウイビラー」を「アイビ ーラー」とする。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
12	p.56 -57	私のも 大分 減りましたから あげるとは 出来ますまい。	ワームヌン ウフォーク イキラク ナトーヤビークトゥ アギーサー ナラン ハズィ ヤヤビースー。
13	p.57	羽織地は 如何でござりましょう。	ハウウイジージャ チャーガ ヤヤビースー。
14	p.57	羽織地は 七八反位は 御あげ申でも 宜うござります。	ハウウイジージャ シチハチタン グレーヤ ウシャギティン ユタシャヤビーン。
15	p.57	只今 頂戴が 出来ましようか。	ナマ ウタビミショーラーガ シャビースー。
16	p.57	只今は 少し 取込(とりこん)でおりますから 夕景(ゆうけい)までに持せてあげましょう。	ナマー ウフェー トウイクドーヤビークトゥ ユサンディマディナカイ ムタチ アギ ヤビラ。
17	p.57	左様でござりますか それはありがとうございます。	アンデービルイ ウレー ミフェーデービル。
18	p.57	貴方は 捌き方が 御上手(じょうず)だが 何割(なんわり)位で 御売立(おうりたて)になりましたか。	ウンジョー ウィイサバチヌ ウジョーズィ ヤヤビースィガ ナンワリヌ シャコー ウミシェービタガ。
19	p.57	凡そ五分位の 平均にも 参りましようか 誠に 僅なもので ござります。	テーゲー グブヌ シャクヌ トウナメー イチュラ ハズィ ヤヤビースィガ ドウツトゥ ワズィカヌ ムンドウ ヤヤビール。

No	現代首里方言	備考欄
12	ワームヌン ユフドウ イキラク ナトーイ ビーグトゥ ワキティ ウサギーシェー ナ イビラン ハジ ヤイビーッサー。	
13	ハウウイジーヤ チャーガ ヤイビー ラ。	
14	ハウウイジーヤ シチハチタン グレー ヤ ウサギティン ユタサイビーン。	
15	ナマ * <u>ウタバミシエービー</u> 。	*「ウタバミシエービーガ サビーラ」でもよい。
16	ナマー イフェー トウイクドーイイビーク トゥ ユサンディ マディナカイエー ムタ チ ウサギ ヤビラ。	
17	アンドウ ヤイビールイ。ウレー ニフェーデービル。	
18	ウンジョー ウィイサバチヌ ウジョージ ヤイビーシガ ナンワリヌ アタイエー ウミシエービタガ。	
19	テーゲー * <u>グブ</u> ヌ サクス トウナー イ チュル ハジ ヤイビーシガ ユフドウ ワジカヌ ムンドウ ヤイビール。	*70代の話者は「ゴブ」とする。

No	頁	本文(和文)	『沖繩対話』本文(沖縄語)
20	p.57	それでは 早く 売れる筈で ござります 以前の商売を聞きますと 此地(ここ)の砂糖 ^イ は極く 賤(やす)く 当て 銘々(めいめい) 持渡りの品は 大概 原(もと)の一倍位にて 勝手(かって)な 取引が出来たと申しますが 御互(たがい)の様な 安売商人(やすうりあきんど)が 来て 脇(わき)の人は 迷惑(めいわく)でござりましょう。	アンシェー フェーク ウラリーラ ハズィ デービル クンナゲーヌ ショーバーヌ ナリュチ チチンデー クマヌ サトーンデーヤ グク ヤスイク アタティ ナーメーメー ムチワトール シナー テーゲー ムトゥヌ イチバー グレー ヤティ ウミチッチ アチネーヌ ディキタンディ イヤビー スィガ ウンジュナー ワッター グトール ヤスイウイシヤーアチネーガッチ フカヌッチョー スクウェー チョーラ ハズィ デービル。

おわりに

上に挙げた現代首里方言版『沖繩対話』は、沖縄県立芸術大学附属研究所で行っている研究会によって得られた言語資料の一部である。この取り組みの目的は通時的な研究の基礎的な資料の作成に重点が置かれているが、将来的には文法書・教科書の例文などにも利用できると考えている。

約135年前と現在の首里方言は相違点がいくつかみられる。以下に明治期と現在の首里方言の相違点のなかから主なものをいくつか挙げる。

(1) 「バカーイ」と「ビケージ」「ビケーン」

明治期には多用される表現が、現代首里方言で減少しているものとして「バカーイ」がある。現代首里方言では「バカーイ」は使用されず、「ビケージ」または「ビケーン」(今回の調査では「ビケージ」の使用度が高い)を使用する。

・ウー クレー グヒヤッタンバカーイ アヤビーン。(はい これは 五百反程 ござります。)『沖繩対話』「商之部」第2回No. 26) →「ウー、クレー グヒヤッタンビケージ アイィビーン。」

No	現代首里方言	備考欄
20	アンシエー フェーク ウラリール ハジ ヤイビーン。クンナゲーヌ アチネーヌ ナリユチ チチンデー クマヌ サーターンデーヤ グクヤシク アタティ ナーメーメー ムチアッチョール シナー テーゲー ムトウヌ ベーグレー ヤティ ウムイ アチネーヌ ディキタンディ ツヤビーシガ ウンジュナー ワッター グトール *ヤシウイイサーアチネーガッチ フカヌツチョー スクウェー ソール ハジ ヤイビーン。	*「ヤシウイイアチネーサーガ」でもよい。

・ウレー ニジューイイン バカーイ アタトーヤビーン。(それは 二十円
計りに 付いております。) 『沖縄対話』「商之部」第2回No. 14) → 「ウレー
ニジューイイン ビケーン アタトーイイビーン。」

(2)その他の単語の違い

明治期の首里方言と現代首里方言では以下に示すように別の語彙を使用する
例が多くみられる。ここでは「第四章 商之部」の各回から1語ずつ示す。

日本語	首里方言		回, 番号
	明治	現代	
全部	スーヨー	ムル	第一回, No7
格別	アンマデー	ナンジュ	第二回, No. 24
大分	テーブン	ウフウフトウ	第三回, No. 3
悉皆	ンナ	ムル	第四回, No. 1

これらの調査は明治期の文例を増やして意味の変化や使用場面の違いについ
て詳しく調査する必要があるが、現時点では通時的な資料が十分ではないため、
今後の課題としたい。

ただし、「悉皆（しっかい）」を意味する単語などは、明治期では「ンナ」を使用している（第4回NO.1例文を参照）が、現在の首里方言で「ンナ」は「主に人を表し、現代日本語の「みんな」に相当する使用に特化しており、人以外の「皆」は「ンナ」ではなく「ムル」を使用するなど、使用する単語を使い分けるように変化してきたと思われる。このような似た単語の使用場面なども気を付けて調査を進めていきたい。

註

1. 『沖繩対話』は明治13(1880)年に沖繩県学務課によって編集された教科書である(上下2巻の分冊)。本永(1983:554)では本書の作成理由について「廃藩置県直後の沖繩で共通語を教えるため」としている。
2. 「商之部」は、明治13年刊行の初版本『沖繩対話』では「第三章」、明治15(1882)年の改正再版では「第四章」である(改正再版本では初版本で第八章であった「名詞之部」が第一章に編成されている)。本稿は初版本の目次の編成通り、「第三回」とする。
3. この首里方言に関して、本永(1983:554)は「内容は、ごく日常的な語句と会話文を取りあげて、共通語と方言(首里の貴族語)の対訳を並記したものである」との見解を示している。
4. 本稿の話者は、首里で生まれ育った仲里政子氏(1923年生)、新垣恒成氏(1932年生)、渡名喜勝代氏(1937年)、山田美枝子氏(1937年)、国吉朝政氏(1940年生)と両親が首里出身で石垣市生まれ、現在首里在住の大道好子氏(1938年)である。
5. ウドゥントウンチのことばを話す人々の多くはあまり多くないが、中松(1982)や比嘉(1987)でインフォーマントになっている方々であり、『沖繩対話』の話者の一人とされる「護得久按司朝常氏」もこの系統の家柄である。
6. 『琉球語便覧』では「直段」であり、本来なら「直段」とすべきところである。しかし、本稿の「和文」は「読みやすさ」を考慮し、「旧仮名遣い」を「新仮名遣い」にするなどの措置をとっているため、ここでは誤字「直」を正しい漢字の「値」に改め、「値段」と記す。
7. 当研究会の名称は「^{ことば}首里言葉の集い」で設立は1998年である。当時沖繩県立芸術大学教授(現名誉教授)であった加治工真市氏が「滅び行く首里方言を記録、保存しておきたい」という目的で創設した研究会である。初期メンバーは中村春子氏、故比嘉恒明氏、新垣恒成氏らであり、現在は仲里政子氏、渡名喜勝代氏、山田美枝子氏、国吉朝政氏、大道好子氏、知念ウシ氏、渡名喜浩子氏、仲原などが集い、毎週水曜日に研究会を開催している。

参考文献

- 沖繩県庁 編(1975[1980])『沖繩対話〔復刻版〕』国書刊行会、東京
伊豆山敦子[編]『放送録音テープによる琉球・首里方言—服部四郎博士遺品—』東京外国

- 語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京
- 内間直仁・野原三義(2006)『沖繩語辞典—那覇方言を中心に—』研究社、東京
- 国立国語研究所[編](1963)『沖繩語辞典』大蔵省出版局、東京
- 糖業研究会出版部[編](1916)『琉球語便覧』糖業研究会出版部、沖縄
- 仲原穰・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2012)「現代首里方言訳『沖繩対話』(1) —「第一章 四季の部」(春・夏)—」『沖繩芸術の科学』第24号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 15-31
- 仲原穰・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2013)「現代首里方言訳『沖繩対話』(2) —「第一章 四季の部」(秋・冬)—」「第二章 学校の部」『沖繩芸術の科学』第25号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 113-154
- 仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2014)「現代首里方言訳『沖繩対話』(3) —「第三章 農之部」『沖繩芸術の科学』第26号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 151-176
- 中松竹雄(1982)「IV 沖縄県那覇市首里」国立国語研究所 [編]『方言談話資料(6)—鳥取・愛媛・宮崎・沖縄—』国立国語研究所、東京、pp. 247-349
- 野原三義(1998[1977])「那覇方言の音韻」『新編 琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所、東京、pp. 713-730
- 西岡敏・仲原穰[著]、伊狩典子・中島由美[協力](2006[2000])『沖繩語の入門(CD付改訂版) —たのしいウチナーグチ』白水社、東京
- 比嘉成子(1987)「『資料紹介』首里方言自由会話『旧正月と大晦日の思い出』琉球方言研究クラブ30周年記念会[編]『琉球方言論叢』琉球方言論叢刊行委員会、沖縄、pp. 73-91
- 本永守靖(1983)「『沖繩対話』おきなわたいわ」『沖繩大百科事典』沖縄タイムス社、沖縄、p. 554